あ【足】〔名〕あし(足・脚)。「足占」「足掻き」「足結ひ」などのように多く複合語の形で用いられた。**例**「——の音せず行かむ駒もが葛飾の真間の継ぎ橋止まず通はむ」〈万葉・四・三八六〉**訳**足音を立てないで行く馬がほしいよ。(それに乗って女に逢いに)葛飾の真間(の千葉県市川市真間)の継ぎ橋を絶えず通おう。〔注〕「継ぎ橋」は、水中に柱を立てて橋板を継ぎ渡した橋。

あ【吾・我】〔代名〕(自称の人称代名詞)わたし。あたし。**例**「我妹子や——を忘らすな石上の袖布留川の絶えむと思へや」〈万葉・三・四〇二〉**訳**愛するあなたよ、わたしのことをお忘れにならないでください。石上で袖を振るという名の布留川の水がいつまでも流れ続けるように、どうして二人の仲が絶えようなとと思おうか。

関連語 類義語の「わ(吾・我)」が公的な場、私的な場でともに用いられたのに対して、「あ」は私的な場で使用され、上代からすでにその用法が限られていた。平安時代になると、それはいっそう進んで、「吾が君」「吾子」など慣用的な表現の中でしか用いられなくなった。

あ【彼】〔代名〕(他称の人称代名詞)あれ。あちら。あの人。**例**「——の書き置きし文を読みて聞かせけれど」〈竹取・かぐや姫の昇天〉**訳**あの人(=かぐや姫)が書き残した手紙を(周囲の人たちが竹取の翁と嫗に)読んで聞かせたが。

《参考》つねに助詞の「の」、または「は」を伴う。

あ〔感〕❶感動したり、驚いたりしたときに発することば。あっ。ああっ。**例**「人の声にて『——』とばかり言ふ声あり」〈今昔・三六・三〉**訳**(鹿がいると思い)歓を射たところ)人の声で「あっ」とだけ言う声がした。

❷相手に応ずる返事のことば。はい。はあ。**例**「凡兆『——』とこたへて、いまだ落ちつかず」〈去来抄〉**訳**(芭蕉の弟子である)凡兆は(芭蕉に)「はい」とは答えたものの、まだ納得がいかない。

❸呼びかけのことば。おい。**例**「主人『——』と言はば、郎等さと出づべき体なりけり」〈源平盛衰記〉**訳**主人が「おいと呼びかけたならば、家来がさっと出てくるようなようすであった。

《参考》近世以前では「あ」と「ああ」とは書き分けがなされず「あ」と記されていることが多い。また狂言などでは「あ」「ああ」は不承知の意を込めて用いられることが多い。

ああ〔感〕〔あ〔感〕〕に同じ。

ああ-まうし【ああ申し】〔感動詞〕(ああ申し)人に呼びかけることば。ああもしもし。ちょっと。**例**「——、お前は病気で引き籠もって世間をご存じございぬ」〈浄・心中重井筒〉**訳**ああもし、お前さんは病気で家にひきこもっていて世間(の流行)をご存じでいらっしゃらない。

あい【藍】〔名〕(中古の)あいぎゃう」の変化形)かわいらしいこと。愛想のいいこと。愛嬌。「口もとより爪先まで——こぼれて愛らしく」〈おらが春〉**訳**

あい…【相…・合…・間…】〔接頭〕歴史的かなづかい「あひ」

あい-ぎゃう【愛敬】〔名〕❶(顔かたち・表情・ものの言いかたなどが)やさしい、思いやりの気持ちが自然に感じられて心が引き付けられること。愛らしさ。かわいらしさ。魅力。**例**「をりにあひたる色あひのなつかしきほどに重なりたる裾まで、——のこぼれ落ちたるやうに見ゆる」〈源氏・竹河〉**訳**季節にふさわしい色調の(着物の)、好ましいようすに重なり合っている裾のあたりまで、(姫君の)魅力がこぼれ落ちているように見える。

❷深い愛情の心をもって、いつくしむこと。愛され好まれること。**例**「この芸とは、衆人にも——をもて、一座建立の寿福と申り」〈風姿花伝〉**訳**この芸(=猿楽)というものは、広く諸人に愛され好まれることによって、一座を成り立たせる福とした。

❸男女が互いに愛情と尊敬の心をもって思いやり、結ばれること。結婚。**例**「げに、——のはじめは目選えりして聞こしめすべきことにこそ」〈源氏・葵〉**訳**なるほど、結婚のはじめには、吉日を選んで(餅を)召し上がるのがよろしゅうございます。〔注〕新婚三日目の夜に餅を食べて祝う習慣があった。→「三日の餅」

【あいぎゃう-づく】【愛敬づく】〔自カ四〕(かきくけ)顔立ち・人がら・動作・態度・声などに愛らしさがそなわる。愛らしい。魅力がある。**例**「うち笑みたる顔の何心なきが、——・きこほひたる、いみじうらうたし」(明石の姫君の)無心ににっこりとほほえんでいる顔が、愛らしく美しくてややかなのを(光源氏は)たいそうかわいいとお思いになる。〈源氏・松風〉

あい-げう【愛楽】〔名・他サ変〕❶〈仏教語〉仏の教えを信じて、願い求めること。

❷〈受身形で用いられる〉愛好すること。好感を持つこと。親愛感をいだくこと。愛すること。**例**「すべて、人に——・せられずして衆にまじはるは恥なむ」〈徒然・二三〉**訳**総じて、人に愛されもしないで多くの人々と交際するのは恥ずかしいことである。

あい-さつ【挨拶】〔名・自サ変〕❶〈仏教語〉禅宗の用語)応対。応答。

❷人と会ったときの儀礼的なことばや動作。

❸紹介。あっせん。世話。**例**「死病に極まる時、夫婦最前の薬師を念に思ひ、——・せし人に面目かへりみず頼みし」〈浮・日本永代蔵〉**訳**不治の病と決まったとき、夫婦は前にかかっていた医者を思い浮かべて、(その医者を)世話してくれた人に体面を捨てて頼んで(治療してもらい)。

❹仲裁。調停。とりなし。

《参考》もと禅宗で用いた語で、門下の僧に口頭試問として、修養の程度をためす意。「挨」も「拶」も押す意で、「挨拶」の原義は押し合いの意。

あい-しふ【愛執】〔名〕〈仏教語〉煩悩の一つ。愛するものにとらわれること。執着すること。愛着。**例**「——の罪をはるかしきこえ給ひて」〈源氏・夢浮橋〉**訳**(薫かおるの、浮舟ふなうへの愛情からの執着心の罪を消え去るようにて差し上げなさって。

あい-しゃう【哀傷】〔名・自サ変〕人の死などを悲しみ悼むこと。

あいしゃう-か【哀傷歌】〔名〕『古今和歌集』以降の勅撰和歌集の部立の一つ。人の死を悼む

内容の歌。『万葉集』の挽歌に相当する。

【あい・す】

【愛す】〔他サ変〕〔せしせすれせよ〕〈漢語「愛」のサ変動詞〉

語義要説 「愛」には漢籍系の「愛」と仏典系の「愛」とがある。**漢籍系の「愛」**は「恵・親・寵・慕・好・仁」に通じ、今日と同じく**プラスの語感**を有する。**仏典系の「愛」**は十二因縁の一つで、「執・貪・染」など執着・執念に通じ、**マイナスの語感**を有する。

①**かわいがる。愛する。**
②**愛好する。愛玩する。**
③**執着する。愛着する。**
④**愛撫する。愛しあう。**
⑤**相手をする。適当にあしらう。あやす。**

❶いとおしく思い、かわいがる。愛する。 例「いづれをも村上の帝ときめかしまうさせたまひしに、いまここ六条殿をば——・しまうさせたまへりけり」〈大鏡・道長〉（一条殿・六条殿のご兄弟のどちらをも村上天皇はご寵愛申し上げなされたが、いくぶん(弟の)六条殿をおかわいがり申し上げなさっていた。 訳

❷たいそう好みにする。愛好する。愛玩する。 例「家に運を植ゑて——・せし時の楽なり」〈徒然・三四〉（想夫恋という楽曲は、もとは古代中国の晋の大臣であった王倹という人が家に運を植えて愛玩したときの楽曲である。 訳

❸大切なものとして大事にする。執着する。愛着する。 例「誉れを——・するは、人の聞きをよろこぶなり」〈徒然・三八〉 訳 名誉を大事にすることは他人の評判がよいのをよろこぶことである。

❹異性を愛する。愛撫する。愛しあう。 例「こよひ正しく女の彼のもとに行きて、二人臥して——・しつる顔よ」〈今昔・三一〇〉 訳 昨夜間違いなくあの女のところに行って、二人共寝して愛しあったときの顔のたらねえ。（注「こよひ」は、夜が明けてから最も近い夜ということで、ここでは昨夜を指す。

❺（「相する」からとも）（幼児などの）**きげんをとる。相手をする。適当にあしらう。あやす。** 例「よしよし、しばし——・せよ」〈平家九・二度之懸〉 訳（東国武士といっても、たった二人だえい、かまわない、しばらく適当にあしらってやれ。

読解のために **「愛す」とは執着することでもある**

現代語の「愛」「愛する」にはプラスの語感があるが、古典語の「愛」「愛する」は必ずしもそうではない。仏教では物事に執心し、執着することを成仏・悟りへの障害とするからである。「今、さびしき住ひ、一間の庵は述べるが、すぐあとに「愛す」〈方丈記・三〉と鴨長明もかもめぐりに対して執心なかれとなる。今、草庵を愛するも、閑寂にふれて執心なかれとなる。世俗的には、愛する」はプラスの語感なのだが、**仏教的観点に立つとマイナスの語感になる**と解釈すればよい。「愛」は出家を妨げる「絆」（＝束縛）にもなるのである。→「思ふ」

関連語 一般に優位にある者が劣位にある者に対して抱く、保護するような感情を行為に表すこと。和語「**あはれぶ**」「**かなしぶ**」「**うつくしぶ**」などとほぼ同義。訓読文に比べ和文での使用率は低い。本来は具体的な事物に対する感情にもとづくものであったが、やがて抽象的な事物にも用いられるようになる。

また、「**思ふ**」が精神的で心の内側にとどまるのに対して、古典語の「愛す」の多くは具体的で行為に表れるという傾向がある。その代表が❹である。

あいだ【間】 歴史的かなづかい「あひだ」

あいだち・な・し【形ク】〈あからさま・かりそめ・しし〉《「あひだちなし」とも》**❶無愛想である。** 味もそっけもない。奥ゆかしさがない。 例「心よからず——・きものに思ひたまへる、わりなしや」〈源氏・夕霧〉 訳（夫の夕霧が私に雲居雁を）性根のよくない、奥ゆかしさのない人間だと思っていらっしゃるのは、耐えがたいことですよ。

❷遠慮がない。 ぶしつけである。 例「——・くぞ愁へたまふ」〈源氏・宿木〉 訳（薫は中の君に）遠慮なしに愚痴をこぼしなさる。

《参考》 語源を「愛立ち無し」または「間立ち無し」とする説があり、それによってかなづかいも「あいだちなし」とするか、「あひだちなし」か、変わってくる。室町時代以降に見られる「あいだてなし」は②の転か。

あいだて・な・し【形ク】〈からくく・かりそめ・しし〉《近世語。「あいだちなし」からの転か》度を超しているようすを言う。思慮分別がない。 例「——・しとも狂気とも笑はば笑へ、言はば言へ」〈浄・用明天皇職人鑑〉 訳 無分別だとも狂気だとも笑うなら笑え、言うなら言え。

あいたんどころ【職所】〔名〕「あいたんどころ」に同じ。 例「職しの御書司ざうし」を『方悪あかた』とて、官のつかさ——に渡らせたまへり」〈枕・故殿の御服の頃〉 訳 →「かた（方）①」用例訳

あい・だ・る【自ラ下二】〈れれる・られる・れよ〉 はた目に甘えた印象を与える。あまえる。 例「海人あまの子なればとて、さすがにうちとけぬさま、いと——・れたり」〈源氏・夕顔〉 訳（夕顔は）海人の子ですからと、やはり（素性を）明かさないでいるようすは、ひどく甘えた調子である。

あいたん・どころ【朝所】〔名〕《「あしたどころ」の変化形。「あいだんどころ」とも》 太政官だいじょうかんの庁内の北東の隅にあった建物。儀式などのさいに参議以上の貴族が会食をしたり、政務をとったりした所。

あい・ちゃく【愛着】〔名〕《仏教語》 異性など特定の人にひかれ、執着しゅうじゃくする気持ち。また、物事に対する深く激しい執着心。 例「まことに——の道、その根深く」〈源氏・夕顔〉 訳 →「ふかし①」用例訳

会津〔地名〕 歴史的かなづかい「あひづ」

【あい・な・し】

〔形ク〕〈からく・かりそめ・しし〉

語義要説 「**あいなし**」「**あひなし**」の両形の表記がある。よって語源については、「愛」あい無し」「かわいげがない、つまらない」「合ひ無し」＝理に合わない、不調和だ」「間あひ無し」＝いわれがない、関係ない、などの説があり、また「敢へ無し」＝こらえられない、「文あや無し」＝筋が通らない、などから転じたとも考えられている。それほどに多義的なことばである。しかし語源が意識されて用いられるわけではないので、語としての「あいなし」の意味をまとめると、おおよそ、**不調和を意識するところから生じる複雑・微妙な違和感を表す**、とみてよく、**文脈に即して、筋が通らない、無益だ、どうしようもない、おもしろくない、興ざめだ、など、適切に解釈する必要がある。**

①**筋が通らない。不当である。よくない。**
②**無益だ。むだだ。どうしようもない。**
③**おもしろくない。つまらない。気にくわない。興ざめだ。**
④**むやみに。わけもなく。ただもう。** ✤「あいなく」「あいなう」の形で

チャート **あいなし**

違和感を表す
- 筋が通らない
- おもしろくない・つまらない
- どうしようもない

「あいなく」の形で
- わけもなく・むやみに

❶筋が通らない。不当である。不都合である。よくない。 例「継母はままはなりし人、くだり国の名を宮にもいはるるに、こと人ひと通かよはして後のちも、なほその名をいはると聞きて、親の、今は——・きよいひにやらむと」〈更級〉 訳 継母だった人は、（父に従って）地方へ下ったときの任国（＝上総かずさ）の名を宮にもいわれるようになった後も、やはりその名前で呼ばれていると聞いて、父が、今はもうその呼び名は不都合だという趣旨を、（継母に）言ってやるのだなんで付けられる。→「な（名）」[読解のために]

❷無益だ。むだだ。どうしようもない。 例「なぞ、かく——・きわざをして、やすからぬもの思ひをするむ」〈源氏・常夏〉 訳 どうして、このようにどうしようもないこと（＝恋）をして、心の落ちつかない悩みごとをするのだろう。

❸おもしろくない。つまらない。気にくわない。興ざめだ。 例「世に語り伝ふる事、まことは——・きにや、多くは皆虚言そらごとなり」〈徒然・三〉 訳 世間で語り伝えることは、本当のことはおもしろくないのであろうか、多くはみな作りごとである。 例「汝なんが目の極めて——・く醜きに抜き代へむ」〈今昔・四・三〉 訳 おまえの目が、まったく気にくわなく醜いので抜いて取りかえよう。

❹（連用形「あいなく」、その音便形「あいなう」の形で副詞的に用いて）**むやみに。わけもなく。ただもう。** 例「まして頤おとがひの細う、愛敬おくれたる人などは、——・く仇かたきにして、御前ごぜんにさへぞ、悪あしざまに啓する」〈枕・職の御曹司の西面の〉 訳 まして、顎あごは細く、魅力の劣った人などは、（行成様を）むやみに目のかたきにして、中宮様にまでも、ことさら悪く申し上げる。 例「目もあやに、あさましきまで——・う、面おもてぞ赤むぬや」〈枕・宮にはじめて参りなる頃〉 訳 目も当てられないほど、あきれるくらいただもう、顔が赤くなることだ。

読解のために **道理に合わないと感じた時—「あいなし」**

「あいなし」は複雑・微妙な違和感を表す語であり、相当量の知識と必要とするはずの心情を、一語で表すことができる。ことにこの語がその表現機能を発揮するのは、平安時代の女流文学においてである。②にあげた『源氏物語』の例文などからも、**内面的なこだわりを表現するのにふさわしい語**であることがわかる。いっぽう、説話文学である③の『今昔物語集』の例文などは、意味は比較的外面的で、単純である。

あいな・だのみ【あいな頼み】〔名〕《形容詞「あいなし」の語幹「あいな」＋名詞「頼み」》 **あてにならない期待**。そら頼み。 例「年月ときを重ねん——は、いと苦しくなんあるべければ」〈源氏・帚木〉 訳 →「そむく」[1]②用例訳

あいべつり・く【愛別離苦】〔名〕《仏教語》 人生で出会う八苦はっくの一つ。愛する親・兄弟・妻子などとの生別・死別の苦しみ。→「八苦はっく」

あい・らし・し【愛らし】〔形シク〕〈しきしくしくしけれしかれ〉 かわいらしい。 例「口もとより爪先まで、愛敬こぼれて——・しく」〈おらが春〉 訳（娘さとの様子は）口もとから爪先まで愛らしさにあふれていてかわいらしく。

あう【合う・会う・逢う・敢う・遭う】 歴史的かなづかい「あを」

あう・い・く【奥行く】〔自カ四〕〈かきけきく〉 先へ進んでいく。奥のほうへいく。 例「こなたさまは、『ただ遅れじ』と思ひつるに、人目も知らず走られつるを、——・かむことこそ、いとすさましけれ」〈枕・五月の御精進のほど〉 訳 →「おくる（後る…）①」用例訳

奥羽〔地名〕 陸奥むつと出羽での両国をいう。いまの東北六県。

あう・ぎ【奥義】〔名〕《「おくぎ」とも》〈かいだいかう〉〈かいじゅう〉 学問・技芸などの奥深くにある重要な道理。極意。 例「——を極めて、よろづに珍し き理ことわりを我れと知るならでは、花はあるべからず」〈風姿花伝〉 訳（能の）極意を体得し、あらゆる場面ですばらしさを生み出す原理を、自分からさとる以外に、花（＝魅力を表す能楽用語）というものを知ることはあり得ない。

奥州〔地名〕 勿来なこそ・白河しらかわの関以北の地で、いまの福島・宮城・岩手・青森の四県。陸奥むつ。

奥州街道〔地名〕 江戸時代の五街道の一つ。江戸・日本橋から陸奥むつの白河しらかわに至る街道で、宿駅は二十七。一説に、白河の先の陸奥の三厩まで含めるとも。

あう・な・し【奥なし】〔形ク〕〈からくく・かりそめ・しし〉 深い考えがない。思慮分別に欠けている。あさはかである。 例「あ

やしく——く、人の思はむところも知らぬ人にて〈源氏・東屋〉〈常陸介はたちの〉は）おかしいほどあさはかで、人の心中も察しない人で。

あうむ【鸚鵡】オウム【名】鳥の名。おうむ。古くは西域の霊鳥とされた。人や他の動物の声をまねる。

あうよ・る【奥寄る】オウ【自ラ四】〈「あうよる」は「奥」の字音〉❶奥のほうに寄る。例「——・りて、三、四人さしつどひて、絵など見るも、あめり」〈枕・宮にはじめてまゐりたる頃〉 訳奥のほうに寄って、三、四人寄り集まって、絵などを見ている人もいるようである。

❷古めかしい。古風である。例「御手の筋、ことに——・りたり」〈源氏・玉鬘〉 訳（末摘花すえつむはなのご）筆跡は、格段と古風であった。

❸年をとる。老いる。例「ことにいまめかしうもあらぬうちに、齢よはひなども、——・りにたべければ」〈蜻蛉・下〉 訳（女は）さらに今ふうでもなく、年齢などもかなり年とってしまっていたはずであるから。

あ-うら【足占】【名】〈「あしうら」とも〉古代における占いの一種。右足左足にそれぞれ吉か凶かを定めておき、目標にたどり着いたときにどちらの足で到着したかによって吉凶を占うという。

あ-うん【阿吽】【名】〈梵語ぼんの音写。「阿」が口を開いて発する最初の字音であり「吽」が口を閉じて発する最後の字音であることから、元来は万物の始源と終極との象徴とされる〉❶吐く息と吸う息。呼吸。

❷山門の仁王像や狛犬いぬの一対など。口を開いているのが「阿」、閉じているのが「吽」。

❸相対する一対のもの。表裏、増減など。

【形動ナリ】〈なら・なり／なる・なれ／なれ／なり／なり〉かよわく頼りないよう。きゃしゃな。例「まだいと——なるほどもうしろめたきに」〈源氏・藤裏葉〉 訳（姫君が）まだほんとうにかよわく頼りないようすなのも気がかりなので。

《参考》「あえか」は下二段動詞「あゆ（落ゆ）」から出た語で、触れるとすぐ落ちるような弱々しさを表している。

あえしらう【歴史的かなづかい「あへしらふ」】

あえず【敢えず】【歴史的かなづかい「あへず」】

あえなし【敢え無し】【歴史的かなづかい「あへなし」】

あえもの【肖像・肖物】【名】〈『あえ』は下二段動詞「あゆ（肖ゆ）」の連用形〉自分があやかりたいと思う対象。あやかりもの。

あお【青・襖】【歴史的かなづかい「あを」】

あおい【葵】【歴史的かなづかい「あふひ」】

あおいのうえ【葵の上】【人名】【歴史的かなづかい「あふひのうへ」】

あおうま【白馬・青馬】【歴史的かなづかい「あをうま」】

あ-おと【足音】【名】あしおと。例「いにしへの継ぎ橋も川瀬におとたれば、げに駒の——もせぬに」〈雨月・浅茅が宿〉 訳古来有名な継ぎ橋も川に落ちてしまっているので、馬の足音もしないほど。〈『万葉集』の歌で望まれたように〉馬の足音せず行かむ駒こまもが…〉〈万葉・四・三三七〉 注「足の音せず行かむ駒こまもが…」をふまえた表現。→「あ（足）」用例

あか-【赤】〈接頭〉（名詞の上に付いて）「まったく」「すっかり」などの意を表す。「——裸」「——下手」など。

あか【閼伽】【名】〈仏教語。梵語ぼんの音写。「遏伽」「阿伽」とも〉仏前に供える物。とくに、仏前にささげる浄水のこと。香水。例「一夏ひとの花もなければ、——のおとなせざりけり」〈平家・四・三井寺炎上〉 訳夏安居あんご（＝夏の九十日間、修行のためにこもること）には花もなく、仏前に供える水を汲む音もしなかったのであった。

あ-が【吾が・我が】■【代・が】は格助詞）❶（「が」が主格を示す場合）わたしが。ぼくが。例「家島は名にこそあり「あゆ（肖ゆ）」の歌で望まれたように〉馬の足音もしないほど。〈『万葉集』の歌で望まれたように〉馬の足音せず行かむ駒こまもが…〉〈万葉・四・三三七〉

あか-【赤】〈接頭〉（名詞の上に付いて）「まったく」「すっかり」などの意を表す。「——裸」「——下手」など。

あか【閼伽】【名】〈仏教語。梵語ぼんの音写。「遏伽」「阿伽」とも〉仏前に供える物。とくに、仏前にささげる浄水のこと。香水。例「一夏ひとの花もなければ、——のおとなせざりけり」〈平家・四・三井寺炎上〉 訳夏安居あんご（＝夏の九十日間、修行のためにこもること）には花もなく、仏前に供える水を汲む音もしなかったのであった。

あ-が【吾が・我が】■【代・が】は格助詞）❶（「が」が主格を示す場合）わたしが。ぼくが。例「家島は名にこそあり「あゆ（肖ゆ）」の歌で望まれたように〉馬の足音もしないほど。〈『万葉集』の歌で望まれたように〉馬の足音せず行かむ駒こまもが…〉〈万葉・四・三三七〉 注「足の音せず行かむ駒こまもが…」をふまえた表現。→「あ（足）」用例

あか【閼伽】【名】〈仏教語。梵語ぼんの音写。「遏伽」「阿伽」とも〉仏前に供える物。とくに、仏前にささげる浄水のこと。香水。例「一夏ひとの花もなければ、——のおとなせざりけり」〈平家・四・三井寺炎上〉 訳夏安居あんご（＝夏の九十日間、修行のためにこもること）には花もなく、仏前に供える水を汲む音もしなかったのであった。

あ-が【吾が・我が】■【代・が】は格助詞）❶（「が」が主格を示す場合）わたしが。ぼくが。例「家島は名にこそあり「あゆ（肖ゆ）」の歌で望まれたように〉馬の足音もしないほど。〈『万葉集』の歌で望まれたように〉馬の足音せず行かむ駒こまもが…〉〈万葉・四・三三七〉

あか-【赤】〈接頭〉（名詞の上に付いて）「まったく」「すっかり」などの意を表す。「——裸」「——下手」など。

山々を見よう。

❸明らかにする。説き明かす。例「この殿より次、さまざま——・したれば、こまかに申さじ」〈大鏡・道長〉訳この殿(=冬嗣)から次は、前にあれこれ明らかにしたので、詳しくは申しますまい。

❹打ち明ける。秘密などを話す。例「ものの聞こえを思ひて、かく——・したまふなめり」〈源氏・行幸〉訳世間の評判を思って、このように打ち明けなさったのであろう。

【あか・ず】【飽かず】**❶もの足りない。満足しない。十分ということがない。**例「——・ず惜しと思はば、千年を過ぐすとも一夜ひとの夢の心地こそせめ」〈徒然・七〉訳(いくら生きても満足せず、命が惜しいと思うならば、(たとい)千年を過ごしても、一夜の夢のように短い気持ちがすることであろう。

❷飽きることがない。いやになることがない。例「ものうち言ひたる、聞きにくからず、愛敬ありて、言葉多からぬこそ、——・ず同かはまほしけれ」〈徒然・二〉訳何かちょっとものを言っているのでも、聞きづらくなく、やさしくおだやかで、口数の多くない人とは、いつまでも飽きることなく対座していたいものだ。

チャート　あかず

①「もの足りない」②「飽きることがない」③「名残惜しい」という訳語を当てはめていく。①はマイナスイメージで用いられ、②はプラスイメージで用いられる。③は②から派生した。

もう十分という気持ちになれない

マイナスイメージ
- もの足りない

プラスイメージ
- 飽きることがない
- 名残惜しい

❸名残惜しい。心残りである。例「さばかりおそろしげなる山中にたちてゆくを、人々——・ず思ひてみな泣く」〈更級〉訳(遊女たちがこれほど恐ろしそうな山の中に帰って行くのを、人々が名残惜しく思ってみな泣く。

品詞分解　動カ四「飽く」の未然形「あか」＋打消の助動詞「ず」

赤染衛門(あかぞめのえもん)〔人名〕(生没年未詳)平安時代中期の女流歌人。父は赤染時用(ときもち)。実父は平兼盛(かねもり)とも。藤原道長(みちなが)の妻倫子(りんし)、一条天皇の中宮彰子(しょうし)に仕えたのち、大江匡衡(ひろひら)の妻となった。歌は同時代の和泉式部(いずみしきぶ)と並び称されるほどすぐれていた。家集『赤染衛門集』。『栄花物語』の作者ともいわれるが未詳。

作品例「やすらはで寝ねなましものを小夜(さよ)ふけて傾かたぶくまでの月を見しかな」〈後拾遺・恋二・六八〉《百人一首》訳→〔和歌〕やすらはで…

あがた【県】〔名〕**❶**上代、大化改新以前、各地方の境界を決め開墾した土地。地方豪族の土地。改新以後は郡(こおり)となった。

❷平安時代、国司として地方官を勤めること。また、その任国。例「ある人、——の四年(よとせ)五年(いつとせ)はてて」〈土佐〉訳ある人(=作者の紀貫之(きのつらゆき))が、国司としての地方官勤務の四、五年の任期が終わって。

❸地方。田舎。

あがた・ありき【県歩き】〔名〕平安時代、地方官に任ぜられて、任国で勤務すること。例「たのもし人は、この十余(とよ)年のほど、——にのみあり」〈蜻蛉・上〉訳→「たのもしびと」用例訳

あか・だな【閼伽棚】〔名〕《仏教語》仏に供えるための水や花を置く棚。→「閼伽(あか)」▼**絵巻図版「閼伽棚」**

例「南竹の簀子(すのこ)を敷き、その西に——をつくり」〈方丈記・〉訳(家の)南側に竹の簀の子を敷き、その西のところに閼伽棚を作って。

あがた・ぬし【県主】〔名〕大化改新以前の「県(あがた)」の長官。大化改新で県が廃止されて郡(こおり)となってからは、氏族を示す姓(かばね)として残されることになった。

あがた・めし【県召し】〔名〕「県召しの除目(じもく)」の略。

あがた・めし・の・ぢもく【県召しの除目】〔名〕《和歌用語》夜が明け

都以外の諸国の国司を任命する行事。毎年陰暦正月十一日から三日間行われる。秋の「司(つかさ)召しの除目」に対して、春の除目とも言う。「県召し」。→「除目(じもく)」。

あか・ち【赤地】〔名〕織物・染め物の地の部分が赤いもの。

あか・つ【領つ・散つ】〔他タ四〕(たちたてて)分ける。分配する。分散する。例「破子(わりご)もて来ねば、さまざま——・ちなとして」〈蜻蛉・中〉訳弁当を持ってきたので、あれこれ分配したりなどして。

関連語「あかつ」と「わかつ(分かつ)」、「あかる(離る)」と「わかる(別る)」の対応関係をなす類義語がある。「あかつ」「あかる」はいくつかに分割・分配・分散する意が、「わかつ」「わかる」は二つに分割・分離する意がそれぞれ原義。

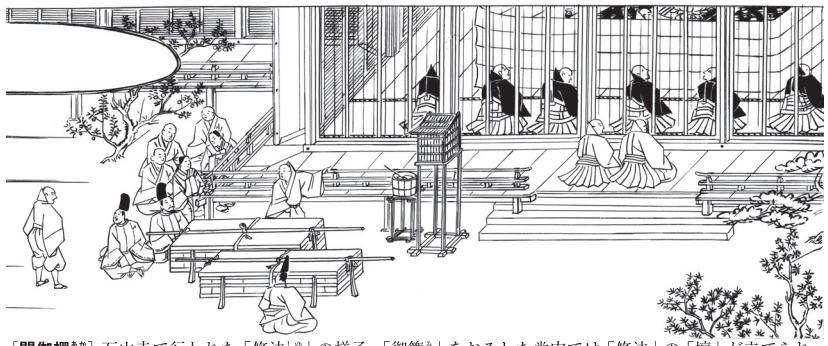
【あか・つき】【暁】〔名〕《①あかとき(明か時)》の転。上代では、夜の明け方。中古以後は《②あかつき》**夜明け前の、まだ暗い時分。**例「あけぼのこそ、やや早い時間帯。**未明。**例「好き好きしくて、人、数見る人の、夜はいづくにかありつらむ、——に帰りて、やがて起きたる、ねぶたげなる気色(けしき)なれど」〈枕・好き好きしくて〉訳(色好みで、おおぜいの人(=女性)と関係を持っている人が、前夜はどこに泊まったのだろうか、未明に帰って来て、そのまま起きているのは、眠そうな顔つきだけれど。

関連語「あかつき」は、夜中を過ぎて朝になるまでの時間帯。明け方に近づきながら、なお明けやらぬ時間を、**しのめ(東雲)**、「あかつき」が明るみ出てきたときを、**あけぼの(曙)**、(=完全に明けきると)**あした(朝)**、**つとめて**」という。また、具体的・視覚的には、**あさぼらけ**」ともいう。「あかつき」「あけぼの」には時間の先後はなく、抽象的に言う場合が、「あかつき」、具体的・視覚的に言う場合が、「あけぼの」であるともいう。

あか・つき【閼伽坏】〔名〕仏前に供える水を入れる器。水を入れる碗(わん)とそれを載せる皿とをいう。多くは銅製。

例「若き尼君たち二三人花奉るとて、鳴らす——の音、水のけはいなど聞こゆる」〈源氏・鈴虫〉訳若い尼君たち二三人が、花を仏に お供えしようとして、閼伽坏が触れ合ってからからと鳴る音や水を流し入れる音などが聞こえてくる。

あかつきおき【暁起き】〔名〕《和歌用語》夜が明



［**閼伽棚**(あかだな)］石山寺で行われた「修法(しゅほう)」の様子。「御簾(みす)」をおろした堂内では「修法」の「壇」が立てられ、その周囲には白い幕が張られている。堂の手前、「階(きざはし)」の脇には「閼伽棚」、閼伽桶(おけ)がある。庭先には「修法」の施物(せもつ)を入れた「長櫃(ながびつ)」が運び込まれている。〈石山寺縁起〉

ける前に起きること。とくに夜明け前に起きて勤行(ごんぎょう)すること。

あかつきがた【暁方】〔名〕夜明け前の暗いころ。

あかつきづくよ【暁月夜】〔名〕《古くは、あかときづくよ》月がまだ空に残っている夜明けがた。また、その月。「あかつきづきよ」とも。

あかつきつゆ【暁露】〔名〕「あかときつゆ」に同じ。

あかつきの・わかれ【暁の別れ】夜をともにした男が、未明に別れて女の人の家から帰ること。例「——は、かうのみや心づくしなる」〈源氏・須磨〉訳夜明けの別れは、ただもうこのように物思いを尽くすものだろうか。

あか・で【飽かで】満足しないで。もの足りないままで。例→〔和歌〕むすびて…

品詞分解　動カ四「飽く」の未然形「あか」＋打消の接続助詞「で」

あか・とき【暁】〔名〕《上代語》「あかつき」に同じ。

あかとき・づくよ【暁月夜】〔名〕《上代語》「あかつきづくよ」に同じ。

あかとき・つゆ【暁露】〔名〕《「あかつきつゆ」の古い形》明け方の露。未明に置く露。例→〔和歌〕わがせこを…

あか・なくに【飽かなくに】**❶**《逆接の意で》まだあかなくに…

❷《詠嘆の意で》**まだ飽き足りないのになあ。**例「我が舟の梶をかなみ引きそ大和へまより恋ひ来し心いまだに——」〈万葉・十・二三〉訳この舟の梶は引くな休めよ、大和から心ひかれてやって来た心がまだ満たされないのだから。

〔注〕「梶を引く」は梶をあやつって舟を進めること。「な…そ」は副詞「な」が終助詞「そ」と呼応して動詞の表す動作を禁止する意。

品詞分解　動カ四「飽く」の未然形「あか」＋打消の助動詞「ず」の古い形の未然形「な」＋接尾語「く」＋助詞「に」→「なくに」

《参考》①のように、ふつうは逆接の意に用いられるが、②のように結句に用いた場合、詠嘆や感動の意を含む。

和歌　**あかなくに…**【飽かなくに　まだきも月の隠るるか　山の端は逃げて　入れずもあらなむ】〈古今・雑上・八四〉在原業平(ありはらの)、伊勢・八二〉訳まだ満足しておらず、もっともっと眺めていたいのに、こんなにも早く月が隠れてしまうのでしょうか。山の端よ、逃げて月を入れないでおくれ。〔**技法**〕三句切れ。〔**注**〕「隠るるか」の「か」は詠嘆を表す終助詞で、「まだきも」の「も」と呼応している。「入れずもあらなむ」の「なむ」は他に対する願望を表す終助詞。

《参考》業平が惟喬(これたか)親王の供をして狩りに出かけ、宿所に帰って一晩中酒宴を開いたとき、親王が寝所へ入ろうとするのを見て、親王を月になぞらえて、おやすみになるのはまだ早すぎます、と引きとめた歌。

あがな・ふ【贖ふ】〔他ハ四〕(はひふへ)「あがふ」に同じ。例「妓女もの)に深くなじみて、つひに——・ひ出いだし」〈雨月・吉備津の釜〉訳遊女に深く親しんで、ついに金を払って身請けをし。

あか・ぬ・わかれ【飽かぬ別れ】**名残惜しい別れ。**例「朝戸開けてながめやるうの——の空を恋ひつつ」〈拾遺・雑秋・一〇四〉訳朝になって戸を開けて、物思いにふけっているのだろうか、織女星は、名残惜しい別れをした牽牛(けんぎゅう)星の立ち去ったあとの空を恋い慕いながら眺めやって。〔**注**〕「ながめ」は「物思い」と「眺め」をかける。

品詞分解　動カ四「飽く」の未然形「あか」＋打消の助動詞「ず」の連体形「ぬ」＋名詞「別れ」

あかね【茜】〔名〕《①赤根(あかね)とも》つる草の名。山野に自生し、初秋に白い小花をつける。根から赤色の染料を作る。その色も「あかね」と称する。(季―秋)

あかねさす【茜さす】〔枕詞〕(あかね色に色づき、美しく映え輝く意から)「日」「昼」「光」「紫」、また「君」などにかかる。例→〔和歌〕あかねさす…

和歌　**あかねさす…**【あかねさす　紫野(むらさき)行き　標野(しめ)の行き　野守(もり)は見ずや　君が袖(そで)振る】〈万葉・一・二〇・額田王(ぬかたのおほきみ)〉訳(あかねさす)紫草を栽培している野を行き、御料地の野を行って、野の番人は見ているのではないでしょうか、あなたが(あっちへ行き、こっちへ行きして)袖を振るのを。〔**技法**〕「あかねさす」は「紫」の枕詞。

《参考》「紫野」は染料をとるための紫草を栽培した野で、そこは「標」を張って一般の立ち入りが禁止された「標野」であった。題詞に「天皇、蒲生野(がまうの)に遊猟(かり)する時に額田王の作る歌」とあり、近江国(おうみのくに)の蒲生郡の野であり、山城国の紫野とは別の地。

あか-はた【赤旗】[名] ❶赤無地の旗。

あが-ひ【贖ひ】[名]《四段動詞「あがふ」の連用形の名詞化。古くは「あかひ」》罪のつぐない。例「酒、くだ物など取り出ださせて——せん」〈宇治拾遺・三三〉 訳〈誓約を破った者には〉酒や肴などを出させて罪のつぐないとすることにしよう。

赤人(あかひと)[人名] →「山部赤人」

あがひもの-の-つかさ【贖物の司】[名] 刑部省に属し、盗品や謀叛人の財産の没収、罰金の徴収にあたる役所。

あが-ふ【贖ふ】[他ハ四]《古くは「あかふ」。「あがなふ」の古い形》❶金品を出すことで罪を免じてもらう。例「中臣の太祝詞をもて——へ——。ふ命も誰がために汝ぞ」〈万葉・七・四〇三〉 訳中臣の立派な祝詞を用いて不浄を供えて罪を免じて命長くと祈るのもだれのためであろうか。みんなあなたのためなのだ。❷買い求める。例「銭十万をもってこれを——。ふに、牛の主許さず」〈今昔・九・三六〉 訳銭十万でこれ(=父親の生まれ変わりの子牛)を買い求めようとしたが、牛の持ち主は願いをいわなかった。

あが-ほとけ【吾が仏】《自分の信仰している仏のように大切に思う気持ちを表した言い方》わたしの大切な方よ。例「——、何事思ひたまふぞ」〈竹取・かぐや姫の昇天〉 訳わたしの大切な姫よ。何を思い悩んでいらっしゃるのですか。

あか-ほん【赤本】[名] 江戸時代、享保ごろを最盛期として流行した草双紙の一種。『桃太郎』など、子供向けの絵入りのおとぎ話を主とし、表紙が赤いところから称。

あか-む【赤む】 ■[自マ四] 赤くなる。赤みを帯びる。例「ことにおどろかず、顔すこし——・みてゐたるこそ、をかしけれ」〈枕・こころは、正月、三月〉 訳〈姫君は〉特別に驚きもしないで、顔が少し赤くなっているようすは、ほほえましい。 ■[他マ下二]〈めめむ・めめむ・めめよ〉 赤らめる。例「かほうち——め『例ならぬ心地出いできたり』とて、里へ帰り」〈平家・六・葵前〉 訳〈葵前まえまいは〉顔を赤らめ、「気分が悪くなりました」と言って、実家へ帰り。

関連語 口の同義語「あかる(赤る)」は上代語。

あが-む【崇む】[他マ下二]〈めむ・むる・むれ・めよ〉 ❶尊ぶ。尊敬する。崇拝する。例「もっとも平家の——・むべき都なり」〈平家・五・都遷〉 訳〈京の都は〉とりわけ平家の者たちが尊ぶべき都である。❷大切にする。かわいがる。例「家に——・めきこゆる人こそなけれ」〈源氏・総角〉 訳家の中に(中の君を)大切にし申し上げる人がいない。

あか-もがさ【赤疱瘡・赤斑瘡】[名] 麻疹。例「今年は——といふもの出で来て、上中下分かず病みのしるに」〈栄花・みねの月〉 訳今年はほしかというものがはやって、身分の上中下の区別なく病みついて大騒ぎしていると。

【あから-さま】[形動ナリ]〈なら・なり・に・なり〉

語義要説 「あからは「あからめ(=ふと目をそらす)」の「あから」に同じく、またたきをする瞬間を意味することから、急に、ちょっと、などの意になる。「あからさまに(連用形)」は、「出いづ」「立ち出づ」「入いる」「行く」「参る」「罷まかる」など、出入りや移動の動作を修飾することが多い。中古の古辞書類や『今昔物語集』、また公家がの漢文日記などでは「白地(=明らかなさま)」の意を表す中国語「白白地」に由来すると表記されている。近世になると、はっきりしている、という意が現れる。これは、明から様」の意に解したためであるらしい。現代語の「あからさま」はこれを引き継いだもの。

①急に。突然に。

②ちょっと。ほんのしばらく。かりに。❖多く「あからさまに」の形で

③ほんの少しも。まったく。❖「あからさまにも…」打消の形で

④はっきりしている。明白だ。❖近世以降

あからひく【赤らひく】[枕詞]〈赤みを帯びる、赤く輝くの意から〉「日」「朝」「膚はだ」などにかかる。

あからめ【あから目】[名・自サ変] ❶わき見をすること。目をそらすこと。よそ見。例「花の本もとには、ねぢ寄り立ち寄り、——もぜまもりて」〈徒然・三三〉 訳→「まもる①」用例訳 ❷他の異性に心を移すこと。浮気。例「いにし男なむ、しかながらはこびかへしてもとのごとく——もせで添ひなにける」〈大和・三三〉 訳去っていった男は、そのまま荷物を運び返して、もとのように他の女に心を移すこともしないで、連れそって暮らした。 ❸姿が見えなくなること。例「我が宝の君はいづくに——・せさせたまへるぞや」〈栄花・花山たづぬる中納言〉 訳私恋しいので(娘の遺児に)お目にかかりたい。こちらによこしてください」と、突然に長歌を併記してよこしたので。 ❷(多く「あからさまに」の形で)ちょっと。ほんのしばらく。かりに。例「をかしげなる稚児ちごの、——に抱いだきて遊ばし愛うつくしむほどに、かいつくきて寝たる、いとうたし」〈枕・うつくしきもの〉 訳かわいい感じの幼児が、ちょっと抱いて遊ばせかわいがっているうちに、しがみついて寝たのは、とてもかわいい。 ❸(あからさまにも」の形で下に打消の語を伴って)ほんの少しも。まったく。例「え見たてまつり棄てず、家に——・にもえ出でざりけり」〈源氏・須磨〉 訳(お供の者は光源氏をお見捨て申し上げることができず、(京の自分の家にもまったく出かけることができないのであった。 ❹(近世以降)はっきりしている。明白だ。例「山蟻がはつきりと見えるよ、白牡丹のまっ白い花びらの上に。」〈新花摘・蕪村ぶそん〉 訳山蟻がはっきりと見えるよ、白牡丹のまっ白い花びらの上に。

類義語 類義語「かりそめ」が、軽い気持ち・本格的ではない状態という心理的な意を表す傾向があるのに対して、「あからさま」は、一時的な状態・仮のことという時間的な意を表す傾向がある。なお、古辞書では「白地」に「かりそめ」と、あからさまの訓を併記している。

関連語 類義語「かりそめ」が、軽い気持ち・本格的ではない状態という心理的な意を表す傾向があるのに対して、「あからさま」は、一時的な状態・仮のことという時間的な意を表す傾向がある。なお、古辞書では「白地」に「かりそめ」と、あからさまの訓を併記している。

類義語 「あからは「あからめ(=ふと目をそらす)」の「あから」に同じく、またたきをする瞬間を意味することから、急に、ちょっと、などの意になる。「あからさまに(連用形)」は、「出いづ」「立ち出づ」「入いる」「行く」「参る」「罷まかる」など、出入りや移動の動作を修飾することが多い。中古の古辞書類や『今昔物語集』、また公家がの漢文日記などでは「白地(=明らかなさま)」の意を表す中国語「白白地」に由来すると表記されている。近世になると、はっきりしている、という意が現れる。これは、明から様」の意に解したためであるらしい。現代語の「あからさま」はこれを引き継いだもの。

①急に。突然に。

②ちょっと。ほんのしばらく。かりに。❖多く「あからさまに」の形で

③ほんの少しも。まったく。❖「あからさまにも…」打消の形で

④はっきりしている。明白だ。❖近世以降

あかり——あき

あかり【明かり】[名]《四段動詞「あかる」の連用形の名詞化》❶物を明らかに見せる光。例「影くらき真木きのしげ山つれづれというを月日の——とも見ず」〈新撰六帖〉 訳槙まきの生い茂った暗い山ではなすこともなく気が晴れないで、月や日の光も見ないでいただけも分からない。 ❷ともび。例「『——をつけやあがれ』といひながら」〈浮世風呂〉 訳「灯火をつけろやいと言いながら。

あが-り【上がり】[名]《四段動詞「あがる」の連用形の名詞化》❶あがること。高くなること。例「寒暑に随ひて——下がりあるべき故に、二月涅槃会ねはんより聖霊会えしょうりょうまでの中間を指南とす」〈徒然・三三〉 訳〈鐘の音には〉寒暑によって音の高い低いがあるはずなので、二月の涅槃会より聖霊会までの中間(の時の音の高さ)を標準とする。 ❷ものごとの仕上がり。出来栄え。例「ねずみ縮緬ちりめんだったが伊予染めに黒裏さ、とんだいい——だった」〈浮世風呂〉 訳ねずみ縮緬だったがそれに伊予染めに黒裏だ。とてもいい染色の出来栄えだった。 ❸商売をしたもうけ。収益。

あが-り-うま【騰がり馬】[名] 前足を上げて跳ね回る馬。跳ね馬。例「兼時は宮城といふ高名のの——に乗りたりける」〈今昔・三三・三六〉 訳兼時かねときは宮城みやぎという有名な跳ね馬に乗っていたのだった。

あかり-さうじ【明かり障子】[名]《「あかりしゃうじ」とも》明かりとりのための白く薄い紙を張った障子。いまの障子と同じ。

あが-り-さわ-ぐ【上がり騒ぐ】[自ガ四]〈がげげ・がげ〉 馬などが勢いよく跳ね上がってあばれ騒ぐ。例「馬の——・ぐなども、いと恐ろしう見ゆれば」〈枕・こころは、正月、三月〉 訳(白馬あをうま)非見の時に)馬が跳ね上がって暴れ騒ぐのなども、たいそう恐ろしく見えたので。

あが-り-たる-よ【上がりたる世】《「たる」は、完了の助動詞「たり」の連体形。「あがりてのよ」とも》大昔。遠い昔の世。例「時ならぬ霜雪を降らせ、雲、雷、かつちを騒がしたる例なめり、——にはありけり」〈源氏・若菜・下〉 訳(琴の音が)季節はずれの霜や雪を降らせ、雲や雷をおこさせた

あが-り-て-の-よ【上がりての世】[「あがりたるよ」に同じ。

あか-る【赤る】[自ラ四]〈らりれる〉《上代語》赤くなる。赤みをおびる。例「島山に——・る橘うずに刺し」〈万葉・一九・四二六〉 訳庭の築山やまで赤く色づいた橘たちばなを髪に飾りとして挿して。

あか-る【明かる】[自ラ四]〈らりれる〉 明るくなる。例「やうやう白くなりゆく山ぎは、すこし——・りて」〈枕・春はあけぼの〉 訳→「やうやう(漸う)①」用例訳

あか-る【離る・別る】[自ラ下二]〈るれるれる・れよ〉 ちりぢりになる。別れる。離れる。例「かたがた、集っひものせられける人々も、みな所どころ——・れ散りつつ」〈源氏・宿木〉 訳〈六条院の〉あちらこちらにお集まりになっていらっしゃった人々もみなあちこちにちりぢりになって。

関連語 「わかる」の場合の主体が、多数の人であるのに対して、「わかる」の場合の主体は、二人を基本としている。

【あが-る】

【上がる・揚がる・騰がる】〈らりれる〉 ❶高い所に移る。例「うらうらに照れる春日にひばり——・り心悲しかなしもひとりし思へば」〈万葉・一九・四二九〉 訳うらうらに照っている春の日に、ひばりが空にあがって(さえずり飛び)、(それなのにわたしの)心は悲しいことだ。たった一人でものを思いにふけっていると。→〔和歌〕うらうらに…

❷官位が進む。昇進する。例「権中納言ちゅうなごん、大納言になりて右大将だいしょうかけたまへるを、今ひときは——・りなむに何ごとも譲りてむ」〈源氏・薄雲〉 訳権中納言が、大納言になって、右大将を兼任しておられるけれど、さらにもう一段階昇進したならば、(光源氏のもっている権限をすべて譲り渡してしまおう。

❸時代をさかのぼる。時代が古くなる。例「大織冠たいしょくかんよりはじめたてまつりて申すべけれど、それはあまりについてから始めさせていたしたげるべきぞや、それはあまりに時代が古くなるので。〔注〕大織冠は、藤原鎌足の称号。

❹神経がたかぶって興奮状態になる。のぼせる。例「見やりてながめ立てりつるほどに、気や——・りぬらむ、ここちいと悪ぁしうおぼえて」〈蜻蛉・中〉 訳その方向(=おばの車)に目を向けてぼんやりと立っていたうちに、のぼせてしまったのだろうか、気分がひどく悪くなって。

■[他ラ四]《近世以降》「飲む」「食ふ」の尊敬語。召し上がる。

関連語 「あがる」の対義語は「さがる」「下る」であるが、前者は中途半端に垂れ下がる意、後者は注意深く下のほうに移動していく意で、どちらも一挙に下降する意ではない。これに対して「のぼる」の対義語「くだる」は道や川などに沿って一気に下に移ることを表す。

あかれ【別れ・散れ】[名]《下二段動詞「あかる(別る)」の連用形の名詞化》❶別れ別れになること。退出すること。分岐。例「弘徽殿ぐこの御——ならむ」〈源氏・花宴〉 訳〈北の陣から出て行った三つほどの車は)弘徽殿からの退出でしょう。 ❷それぞれの系統や派に属するもの。所属する分。例「万々がたの副車ひとたまひ上らへの御方の五つ、女御にょうの殿の五つ、明石あかしの御——の三つ」〈源氏・若菜・下〉 訳婦人方の随行者の乗る牛車ぎっは上の御方(=紫の上)のが五台、(明石の)女御殿のが五台、明石の御方の分が三台。

あか-をどし【赤縅】[名] 甲冑かちゅうの縅の色目の一つ。黒みがかった赤色の縅毛で縅したもの。

あき【秋】[名] 四季の一つ。陰暦七月から九月をいう。五行思想では、金に配する。例「鹿山にもみぢ踏みふ分け鳴く鹿の声聞く時ぞ——は悲しき」〈古今・秋上・三三〉 訳

読解のために 「秋」は「飽き」に通じる季節

平安時代以降の和歌では「飽き」の意をかけて用いられる場合が多い。

例「忘れなむ我をうらむな時鳥ほとときす人の秋には逢ぁはむともせず」〈古今・恋四・七九〉 訳〈訳〉わたしはあなたを忘れてしまおうとは思ってもいませんでいらっしゃいます。夏の鳥であるほどときすが秋に出あおうともしないように、わたしもあなたの飽きにあわないうちに身を引こうと思うのです。)

例「我が袖にまだき時雨しぐれの降りぬるは君が心にあき

や来ぬるむ」〈古今・恋五・七三〉（訳）わたしの衣の袖に、まだ秋でもないのに時雨（＝涙を暗示する）が降りかかったのは、きっとあなたの心の中にわたしに飽きる気持ちがうまれたためでしょう。）

安芸（あき）［地名］旧国名。山陽道八か国の一つ。いまの広島県西半部。芸州（げいしゅう）。

あぎ【腭】［名］「あぎと」に同じ。

あきうど【商人】（アキヌド）［名］《「あきびと」の変化形》「あきびと」に同じ。

あきかぜ【秋風】［名］秋に吹く風。和歌では多く「飽きに」にかけて、男女間の愛情の薄れをいうのに用いられる。

例「深く思ひそめつと言ひしことの葉は何時（いつ）か——吹きて散りぬる」〈後撰・恋三〉（訳）あなたを深く思い染めたと言った私の言の葉は一体いつ秋風（あなたの飽きの風）が吹いて散ってしまったのでしょうか（愛が薄れたのはあなたで、私は昔のことばのとおりです）。

〔和歌〕**あきかぜにたなびくくもの…**【秋風に たなびく雲の 絶え間より もれ出（い）づる月の 影のさやけさ】〈新古今・秋上・四三・藤原顕輔（あきすけ）〉《百人一首》（訳）秋風にたなびいている雲の切れ間から、もれてくる月の光の、なんと清く澄んでいることよ。〔注〕「絶え間」は秋風に吹かれてできた雲の切れ目。「影」は光の意。

〔和歌〕**あきかぜにはつかりがねぞ…**【秋風に 初雁（はつかり）がねぞ 聞こゆなる 誰（た）が玉梓（たまづさ）を かけて来つらむ】〈古今・秋上・三〇・紀友則（きのとものり）〉（訳）秋風が吹くなか、初雁の鳴く声が聞こえてくる。いったい、だれの手紙を足にかけて運んできたのだろうか。〔技法〕三句切れ。〔注〕「聞こゆなる」の「なる」は伝聞・推定の助動詞「なり」（活用語の終止形に付く）の連体形で、ここは聴覚による推定、「はつかりがねぞ」の「ぞ」（強調の係助詞）の結びになっている。

〔参考〕漢の蘇武（そぶ）は、匈奴（きょうど）に捕らえられたとき、雁の足に手紙をかけて放した。それが天子のもとに届き、帰郷することができたという。初雁の声を聞いて、この故事を連想して詠んだのである。

あきかぜの【秋風の】［枕詞］五句説で、「秋」を「金」に配することから「秋風」を「金風」といい、こがね色の意から「端山（はやま）」は、連山の端の人里近い山。「秋篠」は奈良市秋篠町。「生駒」は奈良県と大阪府の境にある山。

俳句**あきすずし**…【秋涼し 手毎（てごと）にむけや 瓜茄子（うりなす）】〈おくのほそ道・金沢・芭蕉（ばしょう）〉（訳）秋の新鮮な涼しさが感じられることだ。さあ、おのおの取りたての瓜や茄子を手にとってむき、ごちそうになろうではないか。（季―秋涼し・秋）

あきた【秋田】［名］《和歌用語》稲の実った秋の田。

あきた【秋田】［名］《和歌用語》稲の実った秋の田。

あきたく【秋闌く】［自カ下二］〈けりたけ・けれたけ・けよたけ〉秋が深まって夜更けに月の光を見ていると、荒れた家で（砧（きぬた）で）衣を打っている音が聞こえてくる。

あきたし【飽きたし】［形ク］〈かくからけれ・しかれ〉《「あきいたし」の変化形。「いたし（甚し）」は程度がはなはだしい意》

飽き飽きする。**うんざりするほどだ**。ひどくいやである。

例「さしあたりて見んにはわづらはしく、よくせずは——きこともありなんや」〈源氏・帚木〉（訳）（あの嫉妬（しっと）深い女を）現に（妻として）世話するとなったら、うるさくて、悪くすると、ひどくいやだと思うことも、きっとあるでしょうよ。

あきた【秋立つ】［自タ下二］〈ちてちつ・ちてれつ・ちてよ〉（暦の上で）秋になる。立秋となる。

例「——と人は告げねど知られけりみ山のすその風の気色（けしき）に」〈山家集〉（訳）秋になったと人はまだ言わないけれど、（秋がきたことは）わかります。山のすそのほうを吹く風のようすで。〔注〕「み山」は、山の美称で、主として和歌に用いられる。

あきだ【飽き足る】［自ラ四］〈らりれる・〉《多く打消や反語表現を伴って》十分満足する。

例「暁（あかつき）の月に向かひて行き帰り鳴きとよむれどなにか——らむ」〈万葉・九・四一六・長歌〉（訳）夜明け前の月に向かって（ほとときすは）あちらこちらに行き来しては鳴き声をあたりいちめんに響かせているが、いくら聞いても、どうして十分満足するということがあろうか。

関連語「あきだる」は『万葉集』で多用される。中古語では十分満足するの意を「あく（飽く）」で表現する。

〔和歌〕**あきちかう**…【秋近う 野はなりにけり 白露の 置けるち葉も 色変はりゆく】〈古今・物名・四四〇・紀友則（きのとものり）〉（訳）秋近く、野はなってきたことだ。白露がおりている草の葉も、色が変わってゆくことだ。

〔参考〕「あきちかう野はなりにけり」に、「きちかうのはな（＝ききょうの花）」が隠されている。このように、与えられた題を隠して詠み込んだ歌を、**隠し題**の歌とか、**物の名**の歌とかいう。「きちかうのはな」を入れるために、わざわざ「ちかう」とウ音便形を用いたのである。

あきづ【蜻蛉】（ズ）［名］《中古以降は「あきつ」》とんぼの古名。

あきつかみ【現つ神】［名］《「あきつみかみ」とも》《姿の見えない神に対し》現世に姿を現している神。天皇の尊称。現人神（あらひとがみ）。

あきづく【秋づく】［自カ四］〈かきくけけ〉秋らしくなる。秋めく。

例「——・けば水草（くさ）の花のあえぬがに思へど知らじ直（ただ）に逢（あ）はざれば」〈万葉・一〇・二三七〉（訳）秋らしくなるにつれ、水草の花が散るように、散らんばかりの気持ちであなたを思っているのですが知らないでしょうね。直接お逢いしたことはないのですから。

関連語「あきづく」は上代語。中古以降は「あきめく（秋めく）」。

秋津島・**秋津洲**・**蜻蛉洲**（あきつしま）［歌枕］《「あきつしま」とも》**大和国**（やまとの）**一国**、もしくは**日本全体を意味する大和**のこと。大和はいまの奈良県をさしたが、日本全体をも意味するようになった。

あきつみかみ【現つ御神】［名］「あきつかみ」に同じ。

あぎと【腭門・鰓】［名］あご。また、魚のえら。

俳句**あきとせ**…【秋十とせ 却（かへ）つて江戸を指す故郷】〈野ざらし紀行・芭蕉（ばしょう）〉（訳）故郷を離れ、この江戸に住み十年の秋を重ねて、今新しい風雅を求めての旅立ちに臨むと、今までは仮の宿りであったこの地（＝江戸）がかえって故郷のように思えてくる。（季―秋・秋）

〈参考〉貞享元（一六八四）年八月、『野ざらし紀行』の旅に立つ折の句。

あきなひ【商ひ】（アキナイ）［名］《四段動詞「あきなふ」の連用形の名詞化》商売。売り買い。

例「いと難き——なり」〈竹取・火鼠の皮衣〉（訳）（火鼠（ねずみ）の皮衣はこの世に存在しないかもしれないので）たいへんむずかしい売り買いであらう「山吹」にかかる。また、「吹き上げ」「千江（ちえ）」（＝地名）などにかかる。

あきがたに【飽き方・厭き方】［名］嫌気がさしてきて、もう別れようと思い始めるころ。

例「深草に住みみける女を、やうやう——にや思ひけむ、かかる歌をよみけり」〈伊勢・一三〉（訳）（男は）深草に住んでいた女を、次第に飽きてきて別れようと思ったのだろうか、次のような歌を詠んだのだった。

〔和歌〕**あききぬと…**【秋来（きぬ）と 目にはさやかに 見えねども 風の音にぞ おどろかれぬる】〈古今・秋上・一六九・藤原敏行（としゆきの）〉（訳）秋がきたと、目ではっきりと見えないが、風の音を聞くにつけ、秋だなとはっと気づかされたことだ。〔注〕「おどろかれぬる」の「れ」は自発の助動詞「る」の連用形。自然と…されてくる、の意。「ぬる」は、完了の助動詞「ぬ」の連体形で、係助詞「ぞ」の結び。

〔参考〕詞書（ことばがき）に「秋立つ日よめる」とある。「さやかに」は、はっきりと、の意。秋の到来は、目には「さやかに」とらえられないが、耳には、さやかに」とらえられるという、視覚と聴覚の相違を利用して秋の到来を詠んだ繊細な感覚の歌である。

あきぎりの【秋霧の】［枕詞］❶《秋霧のようすから》「晴る」「おぼつかなし」「籬（まが）き」などにかかる。❷《秋霧が立つ意から》「立つ」「立田山」などにかかる。

あきくさの【秋草の】［枕詞］《草を結んで幸いを祈るこころから》「結ぶ」にかかる。

あきさ【秋沙】［名］水鳥の名。冬の渡り鳥で、鴨（かも）に似て小さい。あいさ、あいさ鴨。

あきさる【秋去る】《「さる」は時刻や季節などがやってくる意》秋がくる。秋になる。

例→〔和歌〕やすみしし…

あきしのや…【あきしのや 外山（とやま）の里や しぐるらん 生駒（いこま）のたけに 雲のかかれる】〈新古今・冬・六六・西行法師（さいぎょうほうし）〉（訳）秋篠（しの）の外山の里はいまこ

〔和歌〕**あきしのや…**

あきさ【秋去る】《「さる」は時刻や季節などがやってくる意》秋がくる。秋になる。

例→〔和歌〕やすみしし…

あきしのや…【あきしのや 外山（とやま）の里や しぐるらん 生駒（いこま）のたけに 雲のかかれる】〈新古今・冬・六六・西行法師（さいぎょうほうし）〉（訳）秋篠（しの）の外山の里はいまこ

〔注〕初句の「や」は感動を示す間投助詞。二句の「や」は疑問の意の係助詞。「らん」は「らむ」に同じで、眼前にない現在の事柄を推量する助動詞。

〔参考〕「外山」は、里に近い山。「深山（みやま）」は、奥深い山。

あきなひ【商ひ】（アキナイ）［名］物を売ろうとしてたくみに言い立てる口上。

例「——利きて、親の譲り銀を減らさぬ人ならば、縁組みすべし」〈浮・日本永代蔵〉（訳）商売の口上応対が上手で、親からの財産を減らさない人であるならば、縁組みをするべきだ。

あきぐち【商ひ口】（アキナイ）［名］物を売ろうとして

あきづく【秋づく】［自カ四］〈かきくけけ〉秋らしくなる。秋めく。

例「——・けば水草（くさ）の花のあえぬがに思へど知らじ直（ただ）に逢（あ）はざれば」〈万葉・一〇・二三七〉（訳）秋らしくなるにつれ、水草の花が散るように、散らんばかりの気持ちであなたを思っているのですが知らないでしょうね。直接お逢いしたことはないのですから。

関連語「あきづく」は上代語。中古以降は「あきめく（秋めく）」。

秋津島・**秋津洲**・**蜻蛉洲**（あきつしま）［歌枕］《「あきつしま」とも》**大和国**（やまとの）**一国**、もしくは**日本全体を意味する大和**のこと。大和はいまの奈良県をさしたが、日本全体をも意味するようになった。

あきつみかみ【現つ御神】［名］「あきつかみ」に同じ。

あぎと【腭門・鰓】［名］あご。また、魚のえら。

俳句**あきとせ**…【秋十とせ 却（かへ）つて江戸を指す故郷】〈野ざらし紀行・芭蕉（ばしょう）〉（訳）故郷を離れ、この江戸に住み十年の秋を重ねて、今新しい風雅を求めての旅立ちに臨むと、今までは仮の宿りであったこの地（＝江戸）がかえって故郷のように思えてくる。（季―秋・秋）

〈参考〉貞享元（一六八四）年八月、『野ざらし紀行』の旅に立つ折の句。

あきなひ【商ひ】（アキナイ）［名］《四段動詞「あきなふ」の連用形の名詞化》商売。売り買い。

例「いと難き——なり」〈竹取・火鼠の皮衣〉（訳）（火鼠（ねずみ）の皮衣はこの世に存在しないかもしれないので）たいへんむずかしい売り買いであ

あきなひ【商ひ】（アキナイ）［名］《四段動詞「あきなふ」の連用形の名詞化》商売。売り買い。

例「いと難き——なり」〈竹取・火鼠の皮衣〉（訳）（火鼠（ねずみ）の皮衣はこの世に存在しないかもしれないので）たいへんむずかしい売り買いであらう「山吹」にかかる。また、「吹き上げ」「千江（ちえ）」（＝地名）などにかかる。

あきがたに【飽き方・厭き方】［名］嫌気がさしてきて、もう別れようと思い始めるころ。

例「深草に住みみける女を、やうやう——にや思ひけむ、かかる歌をよみけり」〈伊勢・一三〉（訳）（男は）深草に住んでいた女を、次第に飽きてきて別れようと思ったのだろうか、次のような歌を詠んだのだった。

〔和歌〕**あききぬと…**【秋来（きぬ）と 目にはさやかに 見えねども 風の音にぞ おどろかれぬる】〈古今・秋上・一六九・藤原敏行（としゆきの）〉（訳）秋がきたと、目ではっきりと見えないが、風の音を聞くにつけ、秋だなとはっと気づかされたことだ。〔注〕「おどろかれぬる」の「れ」は自発の助動詞「る」の連用形。自然と…されてくる、の意。「ぬる」は、完了の助動詞「ぬ」の連体形で、係助詞「ぞ」の結び。

〔参考〕詞書（ことばがき）に「秋立つ日よめる」とある。「さやかに」は、はっきりと、の意。秋の到来は、目には「さやかに」とらえられないが、耳には、さやかに」とらえられるという、視覚と聴覚の相違を利用して秋の到来を詠んだ繊細な感覚の歌である。

あきぎりの【秋霧の】［枕詞］❶《秋霧のようすから》「晴る」「おぼつかなし」「籬（まが）き」などにかかる。❷《秋霧が立つ意から》「立つ」「立田山」などにかかる。

あきくさの【秋草の】［枕詞］《草を結んで幸いを祈るこころから》「結ぶ」にかかる。

あきさ【秋沙】［名］水鳥の名。冬の渡り鳥で、鴨（かも）に似て小さい。あいさ、あいさ鴨。

あきさる【秋去る】《「さる」は時刻や季節などがやってくる意》秋がくる。秋になる。

例→〔和歌〕やすみしし…

あきしのや…【あきしのや 外山（とやま）の里や しぐるらん 生駒（いこま）のたけに 雲のかかれる】〈新古今・冬・六六・西行法師（さいぎょうほうし）〉（訳）秋篠（しの）の外山の里はいまこ

〔注〕初句の「や」は感動を示す間投助詞。二句の「や」は疑問の意の係助詞。「らん」は「らむ」に同じで、眼前にない現在の事柄を推量する助動詞。

〔参考〕「外山」は、里に近い山。「深山（みやま）」は、奥深い山。

あきなひ【商ひ】（アキナイ）［名］物を売ろうとしてたくみに言い立てる口上。

例「——利きて、親の譲り銀を減らさぬ人ならば、縁組みすべし」〈浮・日本永代蔵〉（訳）商売の口上応対が上手で、親からの財産を減らさない人であるならば、縁組みをするべきだ。

あきぐち【商ひ口】（アキナイ）［名］物を売ろうとして

秋成（なる）［人名］→「上田秋成（あなだなり）」

あきに【開きに開きぬ】いっせいに開いてしまった。

例「立てこめたる所の戸、すなはち、ただ——」〈竹取・かぐや姫の昇天〉（訳）→「たてこむ」用例訳

阿騎野・**安騎野**（あき）［歌枕］大和国（やまとの）にあった野。いまの奈良県宇陀市南西部あたりの地。上代の狩猟地であった。

あきの-こころ【秋の心】秋という季節の感傷。「愁」の字を上下に分けたものと解して用いることもある。

例「ことごとに悲しかりけりむべしこそ——を愁へといひけれ」〈千載・秋下・三五〉（訳）すべての物事が悲しく感じられることだ。なるほどだから秋の心を愁えとは言ったのだ。

〔和歌〕**あきのたの…**【秋の田の かりほの庵（いほ）の 苫（とま）をあらみ 我が衣手（ころもで）は 露にぬれつつ】〈後撰・秋中・三〇二・天智天皇（てんちてんのう）〉《百人一首》（訳）秋の稲田に作られた仮小屋の屋根をふいた苫の編み目が粗いので、私の袖（そで）はいつもいつも夜露にしっとりとぬれている。〔技法〕「かりほ」は「仮庵（かり）」と「刈り穂」の掛詞。〔注〕「苫」は、菅（すげ）・萱（かや）などを、むしろのように編んだもの。「苫をあらみ」の「み」は形容詞の語幹に付く接尾語で、原因・理由を表す。

〈参考〉この歌は、『万葉集』（一〇・二一九〇）の作者未詳の歌「秋田刈る仮廬（かり）を作り我が居れば衣手寒く露を置きけり」が変化したもので、平安時代になって、天智天皇の作とされたと考えられる。

あきの-たもと【秋の袂】（秋は露でたもとがぬれやすいところから）もの思いによって涙でぬれるたもと。

あきの-ちぎり【秋の契り】❶（七夕伝説から）秋に必ず逢（あ）うという男女の約束。❷（「秋」に「飽き」をかけてさめてきた男女の間柄。

〔和歌〕**あきのつき…**【秋の月 光さやけみ もみち葉の 落つる影さへ 見えわたるかな】〈後撰・秋下・四四一・紀貫之（きのつらゆき）〉（訳）秋の月の光が明るくはっきりしているので、紅葉（もみじ）の散り落ちる影までが、一面に見えているよ。〔注〕「光さやけみ」は、形容詞「さやけし」の語幹。「み」は、原因・理由を表す接尾語。

〈参考〉秋の月光に照らされると散り落ちる紅葉の姿や色がはっきり見えるだけでなく、その影までが見えていると詠むことによって、月光の明るさを表現している。そこにこの歌の特徴がある。

あきの-ななくさ【秋の七草】→「ななくさ③」

安芸の宮島（あきのみやじま）［地名］安芸国の地名。いまの広島県廿日市市（はつかいちし）市南部、広島湾内の島。厳島（いつくしま）の別称。弥山山麓（みやまさんろく）に建つ厳島神社は、世界遺産の信仰が厚かった。松島・天の橋立とともに日本三景の一つ。

あきの-ももよ【秋の百夜】（長い秋の夜を、さらに百夜も重ねることから）長い、長い夜。

例「今夜（よ）の早く——の古枝（ふるえ）に咲けるは花見れまもとの心は忘れざりけり」〈古今・秋上・二九〉

（訳）この秋萩は去年の古い枝に咲いているところをみると、以前と変わらぬ気持ちを忘れずに持っていたのですね。〔注〕「ざりけり」は打消の助動詞「ず」の連用形＋過去の助動詞「けり」。

あきは-つ【飽き果つ】［自タ下二］〈ててつてれてよ〉あきあきする。

例「刈れる田に生ふるひつちの穂に出（で）ぬは世をいまさらに——・てぬとか」〈古今・秋下・三〇〉（訳）刈った田の切り株から生えてくる芽が穂になって出ないのは、秋も果てて、世にあきあきしてしまったからなのだろうか。〔注〕「ひづち」は稲を刈った切り株から生えてくる芽。「あきはて」に「秋果て」と「飽き果て」をかける。

あきは-びと【商人】［名］《「あきうど」》「あきんど」とも》商売人。商人（にんじん）。

例「——の一銭を惜しむ心、切（せつ）なり」〈徒然・一〇八〉（訳）商人が一銭を大切にする気持ちは切実なものである。

俳句**あきふかき…**【秋深き 隣は何を する人ぞ】〈笈（おい）の日記・芭蕉（ばしょう）〉（訳）秋が深まり寂しさが増してい